基礎講座

ユニセフ基礎講座　第18回

コルチャック先生の考えた子どもの権利

本号1～2ページで紹介したように、コルチャック先生の実践が大きな影響を与えた「子どもの権利条約」は、国連機関や、国連加盟国あるいはNGO（非政府組織）が話し合い、総合的な意見としてまとまっていったものです。コルチャック先生の子どもの権利についての考え方を、1918年の『子どもをいかに愛するか』と、1929年の『子どもの権利の尊重』という著書から検証してみたいと思います。

「子どもは今を生きているのであって、将来を生きるのではない」

コルチャック先生は子どもは将来、仕事についたり、市民として社会に参加するという見方を批判しています。子どもの今を生きる権利を大切にすることが将来につながるのだと考えているからです。子ども時代から社会の一員として権利を尊重されることなくして、将来の人間として尊重されることはないとしています。

「人生にはあたかも二つの時期があるかのように見える。ひとつは真摯な尊重さるべき時期であり、いまひとつはくつろいでおり、大目に見てもらえるが、たいした価値は持たない時期である。我々は将来の人間、将来の勤労者、将来の市民といったことばをふだん口にする。あるいは、子どもについて、この先どうなるとか、本当のことはずっと後になって始まるんだとか、将来になってみなければ確かなことは言えない、といったことも聞かれる。（中略）人生に戯れごとの時などというものがはたしてあるだろうか。そんなものはない。子どもの頃というのは、長く、そして一生の内で重要な時間なのである。

『子どもの権利の尊重』より

「子どもの意見」

子どもの意見については、まだ成熟していないから聞く必要はない、また親から保護を受けている子どもの言うことは、責任のない者の言うことであるから、耳を傾ける意味はないという見解に対してコルチャック先生は反対を唱えます。この点は「子どもの権利条約」の討議においても、議論がありましたが、第12条(注)として規定されました。

子どもは馬鹿ではない。たとえ子どもの中に馬鹿がいるとしても、それは大人の中にいるほど多くはない。年齢という深紅の衣をまとったわれわれ大人が、何と頻々と、無思慮、無批判にも、とうてい遵守することなどかなわぬような規則を子どもに押し付けていることだろうか。時に賢い子どもは、いい年をした大人の、人を困らせるような愚かさを前にしてあっけにとられるのである。

『子どもの権利の尊重』より

（注）第12条：意見を表す権利

「子どもの権利とおとなの権利」

基本的人権を考える時、権利は自分の血と汗で勝ち取るもの、という見解に対して、人間であれば当然、弱者にこそ基本的人権が守られるようにとコルチャック先生は主張します。弱者の典型は子どもだからです。

もし、人類を子どもと大人に分けるとすれば、また、人生を子ども時代と成人時代に分けるとすれば、世界における、また、人生における子ども時代というものは極めて大きいものだ。ただそれは、人類の闘いや配慮において奥深く沈めてきたもので、我々は気にもとめていないものである。それはちょうど、我々が以前気にもとめていなかった女性や、農民や隷属を強いられていた階級の民族のように。

『子どもをいかに愛するか』より

コルチャック先生は、「人権の基本は、すべての人が同じ人間として価値があるということ」という人権の本質をよく理解していました。しかし、人権はすべての人に保障されているわけではありません。世界ではさまざまな状況によって、人権が侵害されることは後を絶ちません。こうした不安定な人権状況にあって、最も弱い子どもを守ろうとしたのがコルチャック先生でした。

写真の出典：
「コルチャック先生と子どもたち」
P.70　新保庄三著　IUP刊

参考文献

「コルチャック先生と子どもの権利」「コルチャック先生の考えた子どもの権利」の参考文献は次の通りです。

●近藤二郎『コルチャック先生』　朝日新聞社　1995年

●新保庄三『コルチャク先生と子どもたち』IUP　1996年
『子どもの権利の尊重』の日本語訳は新保庄三氏の著作による。

●塚本智宏『ヤヌシュ・コルチャック「子どもの権利」の探求』
稚内北星学園大学紀要第2号　2002年
『子どもをいかに愛するか』の日本語訳は塚本智宏氏の著作による。